

長崎への想い

川内 秀之

大学卒業後、すぐに大学院で免疫病理を学び、外科系の耳鼻咽喉科に入局後、付属病院の材料部長など様々な部署を経て現在に至っている。日常の業務を何とかこなしながら、日本耳鼻咽喉科学会理事として、また日本鼻科学会の理事長として3期目を迎えている状況である。若くして、教授職という難題を恩師に命じられた自分の境遇を今振り返ってみると、お世話になっていらっしゃる方々に恩返しができるかどうかと問えば、五分五分である。

患者さんの立場に寄り添って医療に携わるという精神は、自分を育ててくれた叔父の癌の闘病生活とそれを支える叔母の苦勞を子供の頃からつぶさに見て来て、自然に備わった。島原半島の田舎の漁村で育った自分にとって、15年以上も続いている島根県隠岐島での診療の原点はそこにある。当時、島原で反復性扁桃炎や急性虫垂炎による急性腹症で注射をしてくれた診療所の先生は、子供の自分には近寄りたがたい神聖な神様が仏様に見えていた。



3才の頃

50年以上の歳月を経て、今の自分は患者さんや家族の目にどう映っているのか？と、ふと思う。大病院での頭頸部進行癌の患者さんや家族に正面から向き合うには、多くのエネルギーを注がねば良い結果は得られない。患者さんや家族の社会的背景は様々であり、話し込むうちに貫い泣きすることもある。その時に「Ja vu」として脳裏に浮かぶのは、6回の手術

を受け49歳で他界した不運の叔父と、現在も健在である強運の92歳の叔母である。「長く生きればいいというものではない」と叔母は愚痴をこぼすが、凡人は何のために生きるかを自問自答して日々の人生を送ればよい」と、高校の担任の先生が言っていたフレーズが聞こえてくる。63年という長き人生を無駄にむさぼってきた自分は何者かと問うが、恩師もすでに他界し、誰も答えてくれない。

昨年、高校3年間下宿生活で過ごした長崎市内を訪問する機会を島根の友人から頂戴した。多くの地元の方に歓待していただき、出島や新地の中華街を散策し、短いながら昔の感慨に浸ることが出来た。自分がたどってきた人生の中で、長崎南高校時代の3年間は、青雲の志を抱いていたが、小さい頃から嗜んでいた剣道はクラブで続けていた。休みの日は、ガールフレンドのお蔭で、映画館や長崎港に外人さんの観光案内のボランティアに行っていた。その頃の自分の夢は、東大文Iに入学して、高校か大学の英語の教師になって、世界中を周遊するというものだった。それが、「急に医者にならんか」という話が持ち上がり、コペルニクスの転回で、山口大学医学部→九州大学大学院→大分医科大学→米國オハイオ州立大学留学→島根大学医学部という人生になってしまった。

関門海峡を行ったり来たり時代の時代は遠い過去のものとなり、長年自分を支えてくれていた家内と3人の子供と島根に移動となった。今は松江城の近くに住み、毎日出雲まで車で通勤している。3人の子供たちは、各々伴侶を見つけ、横浜と京都で暮らし、孫も出来て「じいじ」と呼ばれている。

長崎市内にも少々親戚はいるが、なかなか会う機会がない。市内の電車に乗り、赤迫とか新地という名前を見つけると、「ああ懐かしか？」という感じである。チャンポン、皿うどん、カラスミ、カステラ、かんぼこ、

風信

トルコライス、豚の角煮、卓袱料理、長崎物語、茂木びわ、諫早おこし、鱈甲細工、凧(ハタ)あげ、爆竹、おくんち、龍踊、平和祈念像、唐八景、丸山、思案橋、孔子廟、オランダ坂、出島等、まだまだたくさんあるが、最後に長崎南高校というのが私の頭をよぎる若き日のFlash backである。

○長崎の人は、十月九日の諏訪神社の「お上り」がすむと「今年も、おくんちが無事に終りましたね」と、何か一年の行事が全て終わってしまったかのような御挨拶を昔はよく聞いたものでした。○次いで十月十四、十五日は、伊良木の若宮くんちの「竹ン芸」が有名だが、之の他にも「大浦くんち」、「茂木くんち」、「矢上くんち」等と各地の「おくんち」も、大変賑やかであり、近くの「おくんち」には、是非出かけられてみられるとよい。また、その時には、其の地独特の郷土料理があり、ただいてこられるとよい。

○私の家の近くの渡邊壽男氏より御息の源昇氏が著作された本「お寺はじめました」を戴いた。同書について五月十六日発行の朝日新聞(東京)が同封してあり、私は感激して拝読させて戴いた。朝日新聞には次のように記してあった。

源昇さん(31)は長崎市寺町の一角に育った。：中学卒業の翌々日、自分の将来は「これだ」と確信して身延山久遠寺(山梨県)に行き剃髪、高校に進み、更に立正大学夜間部に進み午前四時より日中は修行、夜は大学に行き卒業、更に百日修業、二〇一四年発願して、三十一才の時、縁もゆかりもない越谷の地に三十一才の若きで寺(布教所)を建て二〇一七年七月越谷市宮本町に自分寺を完成：彼の周辺の人から「なぜ寺を建てるの？」と聞かれ「好きでやりますから」と答える。この言葉が全てを悟っている。：(東京原書房刊、本体一、三〇〇円十税)

○今回ご寄贈いただいた書籍
一、長崎大学附属中学校第八回卒業生会より、「被爆体験記」深く読ませて戴きました。中でも菱谷武平先生の「私は其の時、学徒動員の監督教官として出勤中でした：」以下の文章には驚きました。(長大附中第八回生刊)

一、九州歴史資料館より「研究論考集43」今回も多くのすばらしい論考集でした。(福岡県小郡市九州歴史資料館刊、平成二十九年度)
一、橋本剛氏より「つよしの長崎みらい井」橋本氏の自著で「二〇三四年の長崎」に始まり、長崎市関係のアイドル、地域活性化等、多くの地域関係資料が収録されていた。(税込み一、五〇〇円)



2018年元旦 自宅にて

自分はクリスマスチャンではないが、人生には付き物である辛い時間に直面すると、大浦天主堂の眺望と長崎の鐘の音が穏やかに生きろと私の心を時々揺さぶる。恐らくは、有難い神の思し召しか若くして亡くなった叔父の戒めなのだろう。

(島根大学医学部耳鼻咽喉科学教授)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行旧公会堂前出張所2F

